

自選

五十首

吉川宏志



よしかわ・ひろし 一九六九年、宮崎県生まれ。京都大学文学部卒業。歌集に『青蟬』（現代歌人協会賞）、「夜光」（ながらみ現代短歌賞）、「海雨」がある。選集に『セレクトション 歌人 吉川宏志集』。二〇〇五年、「死と塩」三十首で第四十二回短歌研究賞。「塔」選者。

伯林ベルリンにルビふるごとき夜の雪 教室にまだきみは残れり

『青蟬』以前

ガリレオの鉄球木球ふたすじにわれと落ちゆくひとの欲しかり

あさがおが朝を選んで咲くほどの出会いと思う肩並べつつ

『青蟬』

うつぶせの君のとなりにあおむきぬ白きカーテンのくるむ夕焼け

睡りつつまぶたのうごくさびしさを君のかたえに寝ながら知りぬ

窓辺にはくちづけのとき外したる眼鏡がありて透ける夏空

背を向けてサマーセーター着るきみが着痩せしてゆくまでを見ていつ

カレンダールの隅24／31 分母の日に逢う約束がある

風を浴びきりきり舞いの曼珠沙華 抱きたさはときに逢いたさを越ゆ

炭酸のごとくさわだち梅が散るこの夕ぐれをきみもひとりか

夕空はずかに反りて自転車の鍵を外すとしゃがむ妹
頬骨のとがるあたりに引つかかる涙の粒を正面に見つ

花水木の道があれより長くても短くても愛を告げられなかった
画家が絵を手放すように春は暮れ林のなかの坂をのぼりぬ

ふるさとで日ごとに出遭う夕まぐれ林のなかに縄梯子垂る

卓上の本を夜更けに読みはじめ妻の挟みし葉を越えつ

八月の馬乳のような陽を浴びて若き日は過ぐ過ぎて誘ういそぐ

抱いていた子どもを置けば足が生え落葉の道を駆けてゆくなり

ひのくれは死者の挟みし葉紐いくすじも垂れ古書店しずか

夕雲は蛇行しており原子炉技師ワレリー・ホテムチュク遺体無し

死ぬことを考えながら人は死ぬ茄子の花咲くしずかな日照り

この春のあらずじだけが美しい 海草サラダを灯の下に置く

朝雪の短き時間きみと居て髪のうちから首すじに触る

しらすぎが春の泥から脚を抜くしずかな力に別れゆきたり

性愛のためともす灯と消す灯あり白蛾のはねは窓に触れつつ

淡雪の町に泊まりぬ闇のなかねむりを呼べばねむりはこだま

鳳仙花の種で子どもを遊ばせて父はさびしい庭でしかない

戦争を紙で教えていたりけり夜光の雲が山の背をゆく

死に終えて祖母はねむれりあおとおと輪郭のみを泛かべいる山

われはひとつづきのときを生きながら幼き日より山の影さす

「夜光」

高校のときの国語の先生が、歌人の志垣澄幸がまのあきゆきさんだつたのがきっかけで、私は歌をはじめた。大学に入った年の夏、帰省して母校を訪れると、志垣さんはちょうど「星霜」という歌集を出されたころだつたらしく、一冊いただいた。歌集というものを手にするのも、それが初めてであった。帯に歌が一首書いてあり、「丘にたつ一本ゆゑにひもすがら蟬こもらせて縦の樹は啼く」とある。「蟬が鳴くのではない。寂しくて樹が啼くのだ。」と福島泰樹さんが書いていたように思う（今、本が見つからない）。なるほど、短歌というものは、このように日常とは〈発想〉を変化させてつくるものなのだ、と十八歳だつた私は思った。そして、私の短歌の作り方は、基本的に今でも変わっていない。

家のなかに幼い子どもが二人いる。彼らの話をじっくりと聞いていると、子どもはじつに不思議なことを思っているも

口元の笑う遺影の拡大は無数の黒き点ドットがわらう

「海雨」

ウラニウムの知識無きゆえ死にたりと、生ある側に知識は満ちて水のあるほうに曲がついていきやすい秋のひかりよ野紺菊咲く

いつか僕も文字だけになる その文字のなかに川あり草濡らす川顔面の力で男は断るなり河の明かりにさらす顔面

突き刺さる雨もろともに盛り上がる青黒き海、岩場に立てば

われに無き器官を痛みひるがおののように女は傷みやすぎぞ

黒松の林の背せなをのぼりきて潮しほみ盈つ珠たまのごとき月あり

古いにしえと同じ速度にのぼる月 檳榔びんろうの葉に光沢つやを与えつ

天皇が宮崎生まれのわけが無なえ。夕闇ゆうやみに祖母は言いたる

遺品館を出でたる父は「字がうまいものだな」と言う 言いて黙せり（知覧）

にんげんをやめたいなあとおもうから人間なのかオンブバッタよ

河岸のだれも居ぬ火に近づけば火はうつぶせに燃えているなり

春はまだ遠い光源 木の影の縞しまなしている道を歩めり

のぼつてはいけないけれど白梅の横には錆びた階段がある

ああなにか魚のようだ冷凍し精子を残すアメリカの兵

旅なんて死んでからでも行けるなり鯖街道に赤い月出る

ほのじろく塩こびりつく大岩は日暮れの海にしずみゆきたり

人体に溶けている塩 燃やされて塩はいずこに還るか知らず

秋の夜のわれを照らしていた人は触れると割れるランプだったよ

「死と塩」より

のだ、と驚かされる。娘が四歳だったときのことだ。家の近くの神社にお参りしたあとに、「あたし、神様に頭の後ろが見えるようにしてくれて、ありがとう、と言ったんよ」と言った。どうもこの娘は、自分の頭の後ろが見えるものだと思っていたらしい。そしてしばしば、見えないはずのものを言い当てたりして、周りの人たちを気味悪がらせた。寝る前にはいつも神様を呼んで、話をしていた。ただ、小学校に行くようになってからは、あまり奇妙なことを言わなくなったが。

私は霊的なことはまったく信じていない人間だが、人間の感覚というものは、ふだん私たちが思っているよりもずっと広く深いものなのだと確信している。単に「発想」を変えるのではなく、地の底から汲み出した水のような新鮮な感覚がなければならぬことも、短歌をつくり続けるうちにわかってきた。短歌をつくるときや短歌を読むときは、自分が幼いときに戻ったように感覚をふくらませていくのがいいようだ。そうすると、夕焼けや山の林の影などが、奇妙な実在感を持って目の前にあらわれてくるように思われる。